

PHANTASY STAR ONLINE2
the story of ours

爆死したくない揚げ出汁豆腐

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「オラクル」

それは、宇宙を旅する巨大な船団である。旅を続ける最中に見つかった未知の惑星には、「オラクル」にて編成された部隊「アークス」が惑星へと降り立ち、調査を行う。またアークスは、全宇宙を脅かす敵「ダーカー」と唯一戦える存在でもあった。

新たにアークスとなったレイは、安全と思われた惑星に降り立ち初めての任務を行う中、そこにいないはずのダーカーに襲われてしまう。なんとか先輩であるアークスの力を借りその場の危機を脱し、拠点となるアークスシップへと帰還したレイを待っていたのは、シオンという名の不思議な女性だった・・・。

PSO2のオリジナル小説となります。基本原作通りのストーリーですが、所々サブストーリーとしてオリジナルの展開がある場合があります。

初めての投稿作品となりますので、なにとぞ温かい目で見ただけると幸いです。

目次

episode I

零話 プロローグにはなりえない何か

1

壱話

6

弐話 Anything first

contact 10

参話 Whocallsme I

15

e p i s o d e I

零話 プロログにはなりえない何か

あの人はどこだろう。

昨日まで楽しく私と話してくれていた、あの人はどこに行つたのだろう。

昨日まで笑顔で笑っていた、あの人はどこに行つてしまったのだろう。

あの人の姿が見えなくなつて、どれくらいの時間が経つたのだろう。

ここにおいても、あの人が戻つてこないことくらい、だいぶ前からわかつていた。

わかつていた、はずなのに。

私はこれからどうして生きていけばいいんだろう。

そもそも、私は生きていく必要があるのだろうか？

あの人のいない今、生きていく必要なんてどこにもないんじゃないだろうか。

私は、何度目かわからない同じ結論に今日も至る。

「また馬鹿なこと考えてないか？」

そう問いかけてくる声に私は冷静に答える。感情に左右されてそんなことを考えるほど、私は愚かではない。

「ソ、ソンナコトナイデスヨ」

「片言な上に敬語になってやがるぞ」

おかしい、どうしてばれてしまったのか理解できない。ここは話を変えてごまかそう。

「私は、これからどうしたらいいんだろう」

「知らん、そんなもの自分で考えろ」

「でも……」

「自分で考えて、自分で行動しなきゃ意味がない。そう教えてくれたのがあいつだったろう？」

そういわれて、私はハツとする。ああ、そうだった。あの人から何度も、口をうるさくして言われていたことを忘れていた。それくらい今の私は呆けているのだと、ようやく自覚する。

「ありがとう」

「別にお礼を言われるようなことはしてない」

「でも、ありがとう」

「……ああ」

そう言つて顔を背けるのは、照れているからだということ 私は知つてゐる。この人はお礼を言われることに慣れてない。だからそういうことをされるとどうしていいかわからなくなつてしまうのだ。その結果として顔を背ける。普段の粗暴な物言いも、ただ素直になれないだけで、本当はとても優しい人だということ 私は最近知つた。

「お前全部声に出てるぞ」

「えっ」

「えっじゃねえよ！その私に対する評価というか語りを間近で聞かされる私の身にもなれよー！」

「……ごめんなさい」

「つたく、気を付けろよ……気が付くとすぐ声に出てるんだからな」

「わかった」

ほんとにわかってんだらうかと疑ってくる。ずいぶんと信用がないものだ。

何の話をしていたんだらう、話を続けるうちに忘れてしまった。ああ、そうだ。これからどうするかだった。どうするかなんて決まっていたようにも思える。その答えは私が初めから持っていたものだ。ただ、私が逃げていただけだ。

でも、もう逃げない。あの人から受け継いだものを心に留めて、私は前に進む。進まなきゃダメなんだ。

「ねえ」

「ん？なんだ」

「私……」

すーっと息を吸って吐いて、言葉を紡ぐ。その一言で私の人生が、大きく変わる事がわかっていたとしても、そうしなきゃいけない。

「私、アークスになる」

「……………そうか」

私——レイの運命の歯車が、ここから動き始めたのだった……

壺話

A. P. 238年2月20日AM10:00

「ついに……ついにこの日が……！」

大宇宙に浮かぶ宇宙船「アークスシップ」の一隻の中で、私——レイは静かに喜んでいた。あの日アークスになろうと決めてから、様々な苦難があつたけれどようやくアークスになれる日が来たのだと思うと、とてもうれしくなった。

「い、い、いほんー！」

浮かれてはだめだ。なぜならまだアークスになれるということが決まっているわけではない。慎重に挑まないときつと失敗してしまうだろう。この修了任務を無事に終えることができ初めて、私はアークスとして一人前になれるのだ。そんなことを言われた記憶はないけどもきつとそうなのよ、そうに違いないわね。

今私たちの乗っているアークスシップは、惑星「ナベリウス」に向かっている。ナベリウスは惑星の中でも安全な方で、ダーカーが出現しないとされている。そのため今回の修了任務における実地訓練では最適とされている、らしい。

らしいというのは、船内放送で偉いアークスからそのことについて説明があったらしいのだけど、私はこれからのことについて瞼を閉じ思案していて、言葉が耳に入ってきていなかった。寝ていたとも言えるんだけどね。そのため後で他のアークスから聞くことになっちゃった。

「さて……」

私は今自分がいるアークスシップの一室？をぐるりと見回してみた。そこには私と同じように、修了任務に臨む者達がいた。男性も女性もいる。アークスにおいて男女の差はほとんどないと言える。アークスにとって重要なのは一つ、フォトンへの適性があるかどうか。これもまた他のアークスが教えてくれたことだった。教えてくれたあの黒人アークス優しかったな、と思い返してみてもふと思った。その時、
突如として、ピーッピーッ！という音が響き渡った。そして、

「到着したようだな」

渋く重さを感じさせる老練された男性の声が船内に響いた。一瞬敵襲なの!? と思ってしまった私が恥ずかしい。

「先ほども言ったが、これから向かう惑星はナベリウス。文明は存在せず、現生している生物等は皆、凶暴だ。決して油断はするな。健闘を祈る」

おそらく、先ほどの偉いアークスと思われる人物だったんだろうけど、わざわざ二回も説明してくださるなんてありがたい。あれだろうか、大事なことなので二回、というやつなのかな。詳しくは聞いたことはないんだけどね。

などとくだらないことを考えている時でも、偉いアークス様の説明は続いていた。

「今から諸君らは、広大な宇宙へと第一歩を踏み出す。覚悟を決め、各々のパーソナルデータを入力せよ。入力が終わった者は、転送座標が定まるまで待機せよ」

パーソナルデータ……? あ、このなんか壁際にあるデータベースみたいなので入力す

ればいいのね。と確認していると、

「ようこそ、新たに誕生するアークスよ、我々は諸君を歓迎する」

これにて説明は終了する、という音声を最後に通信は終わったようだった。あの渋いお声のアークスが誰だか私はまだ知らない。でも、そんな人からの歓迎するという言葉を聞いたとき、私は嬉しくなった。これからアークスの一員として頑張っていかなければ……！

と、私が改めて決意をしていると

「ごめんなさい、お待たせしましたー！」

という声とともに、この部屋？というか待機所にある、私のすぐ後ろのワープゲートから誰かが転送されてきたみたい。ここでは大半の移動はワープゲートなどを通じて行われている。誰だろうと思ひ、その声が出た方を振り向くと……。

可愛らしい小さな女の子がこちらを見て笑っていた。

式話 A n y t h i n g f i r s t c o n t a c t

「えっと……」

「ワープ装置から転送されてきた少女を見て、私は戸惑った。なぜならそこにいたのは、私よりもはるかに幼い少女だったから。少女？一歩間違えれば幼女に見え……ゲフンゲフン。」

「そ、それはともかく、……この子もアークスなのだろうか。ここにいるからそうなのかもしれないけど、この子は幼すぎる気がする、その、見た目的に。私は現在19歳だけど、よく成人済みに間違われることがある。自分でもそれなりにスタイルのいい方だという自覚はある。そのために日々努力もしているし。……話がそれってしまった。この子は見た目的には15、16、下手をしたらそれ以下の年齢に見える。こんな小さな子でもアークスになれるんだなあ、と思つてしまった。」

「あの一……?」

とうかこの子がアークスになることができたのは試験官が幼女好きだったとしか考えられない。ロリータコンプレックス、というものらしい。あれかな、おじさんにいいことしてくれたら合格にしてあげるよ、みたいな。……何という危ない試験なのだ。これは大変だ、すぐに辞めさせないと。

「あ、あのー！ー！」

「えっ？」

　　見るとその少女が私の方を見ていた。顔を赤く染めて。……まさかとは思うけど、

「もしかして、声に出てた……？」

「は、はい……」

　　そう言ってますます赤くなってしまった。何度目かわからない失敗をまたしてしまつたようだ。治さないととは思つてもなかなかうまくいかない辛い悲しいもうだめだ。……反省（自虐）は後にして、

「え、えっと、あなたもアークス、なのよね？」

「は、はい、そうです！」

力強く答える彼女。その眼はしっかりと私のことを見ている。……なんというか女の子からこうしてじーつとみられることはないからか、ドキドキしてしまう。百合に目覚めそう。

「じーつ……」

アークスジョークはともかく、この子はどうしてずっと私のことを見てくるのだろう。私からもじーつと見つめ返してみる。

「じーつ」

「……あう」

照れて俯いてしまった。何この子可愛いお持ち帰り……はやめておこう。全国の大きいお兄さんたちから総攻撃を食らわされそうだから。

アークスジョーク（笑）はこの辺にしておいて、そろそろ本題に入ることにしよう。

「あの、あなたは どうして私のことをずっと見てるのかな……？」

「そ、それは……」

「うん？」

「私と、ペアになつてもらえないかなーって思つて」

「ペアあ？」

ペア——二人一組の総称、オスとメスを表す、時として恋人を表す場合もある。

えっ、この子男の子だったの？それとも男の娘……？まさか、私に告白を!?

アークスジョーク（三回目、そろそろ飽きた）はいい加減怒られそうなのでやめるとして、ペアって何のことなんだろう。

「えつとー、さっきの通信で二人一組で行動すること、つて言われたので……ほかの皆さんはもう行つちやつたみたいで」

聞いてないんですけど!?!また聞き逃したのかなあ……難聴になつた覚えはないんだ

けど。

私はあとで病院に行くとして、確かに周りにいたアークスたちはいつの間にかいなくなっている。じゃあ、この子と組むしかない、かな。

「わ、私でよかつたらお願いね」

「は、はいー！こちらこそよろしくお願いしますー！」

明るく屈託なく笑うこの子に聞き忘れていたことがあったのを思い出す。

「あ、あなた、名前は？」

「え、えと・・・」

彼女はしばらく口をもごもごさせていたがやがて意を決したように顔を見上げて、

「にや、にやにも、ですー！」

これが、私と「彼女」の最初の出会いだった。

参話 Who calls me I

「にやにも、さん。……わかりました、私はレイといいます、これからよろしくお願いしますね」

「は、はいっ！」

私を見て元気にそう返事をする彼女。とても可愛い。にやにもって珍しい名だと
思ったことは黙ってしよう。

つと、思えばずいぶん長く話し込んでしまった。試験官の人に怒られてしまうかもしれない。急ごう。

「は、はい！」

返事をする彼女にこくりとうなずいて、私は試験会場となるナベリウスに降り立ったのだった。

「ここが……惑星ナベリウス」

アークスシップから降り立った私たちの目の前に広がっていたのは、生い茂る木々や草、綺麗な花々だった。

「うわあ……空気が綺麗なところですねえ」

そう言って、んーっと伸びをするにやにもさん。確かにここは綺麗な場所だ。ダーカーがいらないのもうなずける。ここならダーカーに襲われることなく、安全に試験を行えるだろう。試験自体が危険だった場合はどうしようもないけれど。それで、まずは何をすればいいのだろう。

「私たち、戦闘経験はまだなので、練習くらいはさせてもらえるみたいですね」

そうだったのか。この際だからはっきり言うと、話を全く聞いていなかった。

「だ、ダメダメじゃないですか！」

ダメダメだつていいじゃない、だつてアークスだもの。

開き直りはさておき、戦闘の練習は……しなくていいかなあ。だつて面倒だし、それに万が一、練習で怪我をってしまったって修了任務を受けることができないなんてことがあつたりしたらどうするんだ。うん、それがいい。練習は無しだ！

「そ、それでほんとに大丈夫なんですかね……？」

大丈夫大丈夫、もし何かあつたらその時に判断できるようにしなきゃ。

「そ、そうなんですかね……」

きつとそう。さ、とりあえず先に進んでみましょう。

「は、はーい」

……………探索中……………

10分ほど歩いてからだろうか、私たちの目の前に一匹の猿のような原生種が姿を現した。見たところ毛づくろいをしてるみたいだけど。……………あ、こつちに気づいた。そのまま一直線にこつちに向かってくる原生種。

「あ、あの……………どう見ても仲良くしましようにっつて雰囲気じゃ……………ないですよね」

「やるしかない、かな」

そう言っつて修了任務のために渡された、ライフルを構える。任務以外で使うことはほとんどないと思っつてたけど、緊急事態だけにしかたない。にやにもさんも同じくロッドを構えた。テクニック主体で戦うタイプの人のようだ。

「それじゃあ、やるよー!」

「は、はいっ!」

私たちは初めての戦闘へと臨んだのだった。